

成果報告書

田尾圭一郎（特別招聘准教授）

展覧会名：SFC「現代アート概論」最終課題展 DIS:SOLVE とくとかとうとか」展

会期：2025年1月14日(火)～23日(木)

場所：慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス τ ギャラリー

■取組み概要

VUCA や多様性が言及される現代において、SFC 教育における特徴のひとつ“分析的社會実装（定量的なロジカルシンキングや実践的問題解決等）”に加え、現代アートのやわらかな社會実装（想像力や問題提起する力、複層的な解釈）を両輪的に活用することを目指し、展覧会を開催。学生が“アートの社會実装”を実践しラーニングする場であるとともに、“多義多層的な問題解決”を現代社会に提案し、“SFC の社會実装”の更新を試みた。

具体的には、講義を受講する学生のなかから展覧会実行委員と出品アーティストを有志で募り展覧会づくりを協働することで、“アートの社會実装”をより実践的に体験する機会をつくった。実行委員会はキュレーター・PR・編集・デザイン・会場設計・リサーチャーの役割に分かれ、アーティストの作品プランを各々の視点から議論し、展覧会づくりに取り組んだ。

また、講義の最後には、作品を出品した学生本人から他の受講生に作品コンセプトなどをプレゼンテーションしレビューを受ける機会を設け、他者によるフィードバックと評価も行った。

■実施によって得た成果

・学生の実体験

講義では主に座学によって「ビジネスや日常生活のなかに如何に現代アートの思考モデルを取り入れるか」を伝えたが、展覧会でコンセプトメイク～作品制作～プレゼンまでを一貫して体験する機会をつくった。そのなかで、コンセプトづくりの面白さや表現する喜び、第三者に伝えることの難しさなど様々な経験をすることができた。多くの学生から「自分がアーティスト（表現者）になり得ることは自信につながった」「社会の見方やキャリアプランを考えるうえで大きな刺激となった」などの実感を感じて得ることができた。





・表現者／鑑賞者としての受講生徒双方の学び

また、講義において（教員よりも身近な）学生同士でプレゼンテーションとレビューを行うことで、双方に刺激と学びを提供することができた。等身大の感想やざっくりぼろんな作品の批評は、アーティストとしての学生にとって非常に有益なフィードバックとなった。また、受講生にとっても、同世代の作品や思想に感銘を受け、アートか否かにかかわらず表現することの大切さを学んでもらうことができた。双方にとって、受動的な“勉強”ではなく主体的な“学び”の機会としてこの展覧会を機能させることができ、私自身も教育者としての経験を深めることができた。



■今後の展開

これまでプロの現代アート関係者と協働することが大半だったが、アートの専門性を持たず他分野を志す学生に、現代アートの思考モデルを実装することを目指して講義を行ってきた。座学に加え展覧会づくりとレビューという実践によって、より強度のある体験として学生に提供できたことを嬉しく思う。今後は、ビジネスマン・地域住民・産業…と多様な対象への「現代アートの社会実装」の経験値を深めることで、講義内容の実効性や説得力を高めていけるようにしたい。